

第四章 調査対象者の景観認識

4-1 調査実施概要

4-1-1 調査対象者

アンケート調査は2005年の7月～8月の間に実施した。

「色彩参画」による景観形成実験へ参画した調査対象者に対しては、筆者らが2005年8月11日に各戸をまわり、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートを配布した。回収は2005年8月20日に筆者らが各戸をまわり、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートを同時に回収した。

「色彩参画」による景観形成実験へ参画しなかった調査対象者に対しては、2005年7月30日に行われた夏まつり実行委員会の会議時、2005年8月6日に行われた高宮学区連合自治会の定例会時に事前アンケート調査を実施し、その場で回収を行った。不参画者への事後調査は、2005年8月21日の夏まつりの反省会時に、事後アンケート調査を実施し、その場で回収した。詳細は表4-1を参照。

表4-1 アンケート調査実施概要

対象	参画者	不参画者		全体
	中町・本町の地域住民	夏まつり実行委員会	高宮学区連合自治会	
事前アンケート配布日	2005年8月11日	2005年7月30日	2005年8月6日	
事前アンケート回収日	2005年8月20日	2005年7月30日	2005年8月6日	
配布数	84	29	19	
有効数	32	17	8	57
有効回答率	38.1%	58.6%	42.1%	43.2%
「色彩参画」実験	2005年8月14日			
事後アンケート配布日	2005年8月11日	2005年8月21日		
事後アンケート回収日	2005年8月20日	2005年8月21日		
配布数	84	54		
有効数	32	25		57
有効回答率	38.1%	46.3%		41.3%
総配布数	168	102		270
総有効数	64	50		114
総有効回答率	38.1%	49.0%		42.2%

以後、実験前に行ったアンケート調査を「事前アンケート調査」、実験後に行ったアンケート調査を「事後アンケート調査」と表現する。

「配布数」とは、アンケート調査票を配布した数である。「有効数」とは、調査有効サンプルの回答したアンケート調査票の数である。調査有効サンプルとは、総調査対象者から事前アンケートのみ、もしくは事後アンケートのみにしか回答していないサンプルを除いたものであり、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートに回答したサンプルのみで構成されている。

以後、調査対象者を「サンプル」と表現する。

4-1-2 調査対象者のサンプリング

本研究における調査有効サンプルは、参画者 32 人、不参画者 25 名、合計 57 人である。調査有効サンプルの回答した事前アンケート、事後アンケートで構成される調査有効アンケート数は配布数 270 枚中 114 枚(42.2%)である。調査有効アンケートとは分析段階で分析可能なアンケート調査票を指す。本研究では、事前アンケート、事後アンケートの両アンケートに回答したサンプルのみを調査有効サンプルとして扱っているために、有効回答率が低くなったと考えられる。

調査有効サンプルのうち、事前アンケートでは実験参画者 1 人、実験不参画者で 6 人、事後アンケートでは実験参画者 3 人、実験不参画者 3 人が、街路景観イメージに関するアンケート調査項目¹⁾において一部、無回答の評価尺度があった。そのため、これらのアンケートは景観イメージ構造の分析には用いないとした。しかし、景観認識に関するアンケート調査項目²⁾に関しては回答している。そのため、一部の評価尺度は無回答ではあるものの、街並みをイメージする色の把握、街並みへの関心の把握、実験への参画度の把握を行う上では有効であると考えた。

そのため、街路景観イメージに関するアンケート調査項目において一部、無回答の評価尺度があったアンケート調査票も街並みをイメージする色の分析、街並みへの関心の分析、実験への参画度の分析に関しては、調査有効アンケートとして扱うこととした。

以下、各分析の対象とする調査有効アンケートについて説明する。

「街並みをイメージする色の記述数」、「街並みへの関心」に関する分析は、全調査有効アンケートを対象に分析を行う。

「街並みをイメージする色の想起理由」に関する分析は、街並みをイメージする色項目への回答のある調査有効アンケートを対象に分析を行う。

「実験への参画度」に関する分析は、実験後に参画者の回答した調査有効アンケートを対象に分析を行う。

「景観イメージ構造」に関する分析は、街路景観イメージに関するアンケート調査項目で、欠損値の見られたアンケート調査票(事前アンケート：実験参画者 1、実験不参画 6 事後アンケート：実験参画者 3、実験不参画者 3 合計 13)を除いた、調査有効アンケートを対象に分析を行う。

分析の段階でそれぞれ対象となる調査アンケート数は表 4-2 を参照。

表 4-2 分析ごとの調査有効アンケート数

分析対象	内訳		計
	参画者	不参画者	
街並みをイメージする色の記述数	64	50	114
街並みをイメージする色の想起理由	48	32	80
街並みへの関心	64	50	114
実験への参画度	29	0	29
景観イメージ構造	58	32	90

4-2 サンプルの特徴

参画者、不参画者の両者の属性について単純集計を行った。

詳細は表 4-3、表 4-4 を参照。

表 4-3 参画者、不参画者の性別及び年代

	性別				年代							
	男性	女性	無回答	計	90代	50代	40代	30代	20代	10代	無回答	計
参画者	17	14	1	32	17	5	3	4	1	1	1	32
不参画者	19	6	0	25	9	10	3	1	2	0	0	25
計	36	20	1	57	26	15	6	5	3	1	1	57
全体%	63.2%	35.1%	1.8%	100.0%	45.6%	26.3%	10.5%	8.8%	5.3%	1.8%	1.8%	100.0%

表 4-4 参画者、不参画者の職業

	職業								計
	商工自営業	主婦(主夫)	無職	公務員	会社員	学生	その他	無回答	
参画者	10	7	5	4	3	1	1	1	32
不参画者	6	2	5	1	7	0	4	0	25
計	16	9	10	5	10	1	5	1	57
全体%	28.1%	15.8%	17.5%	8.8%	17.5%	1.8%	8.8%	1.8%	100.0%

性別では、男性が参画者 17 人、不参画者 19 人、女性が参画者 14 人、不参画者 6 人であった。全体では男性が 36 人であり、全サンプルの 63.2%を占めていることがわかった。参画者と不参画者を比較してみると、不参画者の男性の割合が高いことがわかる。これは、不参画者として選定したサンプルに、高宮町の連合自治会が含まれているためである。連合自治会への出席者は全てが男性で構成されている。

年代では、参画者で 60 代以上が最も多く 17 人であった。不参画者では 50 代と 60 代以上が多く、50 代 10 人、60 代以上 9 人であった。参画者、不参画者ともにサンプルの年齢層は高いことがわかった。全体では 60 代以上が 26 人と最も多く、全サンプルの 45.6%を占めていることがわかった。年代に関しては、参画者と不参画者の間に大きな差は見られない。

職業では、参画者が商工自営業と主婦(主夫)が多く、商工自営業 10 人、主婦(主夫)7 人であった。不参画者は会社員、商工自営業が多く、会社員 7 人、商工自営業 6 人であった。全体で見ると、商工自営業が 16 人と最も多く、全サンプルの 28.1%を占めていることがわかった。職業に関しても、参画者と不参画者の間に大きな差は見られない。

4-3 街並みをイメージする色に関するアンケート結果

4-3-1 街並みをイメージする色の傾向(全体)

街並みをイメージする色の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケートないの「街並みをイメージする色」項目³⁾への回答結果の単純集計を行い、考察する。

「街並みをイメージする色」項目へ回答された色の集計結果を表 4-5、図 4-1 に示す。

全体の合計値では、赤が最も多く、次に青、灰、茶、緑の順で割合が大きくなっている。

事前アンケートの合計値では、青が最も多く、次に茶、赤、灰の順で割合が大きくなっている。事後アンケートの合計値では、赤が最も多く、次に青、灰、橙の順で割合が大きくなっている。

実験を行う前後の変化を見てみると、大きく回答数が増加した色は、赤と橙の 2 色である。事前アンケートの結果では、街並みをイメージする色を赤と回答したサンプルが 6 人なのに対し、事後アンケートの結果では赤と回答したサンプルは 4 倍弱の 23 人に増加し、事後アンケート結果全体の 40%以上を占めている。また、橙は事前アンケートでは見られなかった色であるが、事後アンケートでは 4 人のサンプルが街並みをイメージする色を橙と回答している。

事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が減少した色は、青と茶の 2 色である。事前アンケートの結果では街並みをイメージする色を青と回答したサンプルが 11 人と事前アンケート結果全体の 20%弱を占めているのに対し、事後アンケートの結果では青と回答したサンプルは半分程度の 6 人に減少している。また、茶は事前アンケートの結果では、7 人と 10%以上を占めていたのに対して、事後アンケートの結果では、回答が無くなっている。

実験を行うことによって大きく回答数が増加した赤と橙の 2 色は、明度が高く、暖かいイメージを持つ色である。赤のイメージの特徴は、「情熱的、くどい、動的、暖かい」⁴⁾である。橙のイメージの特徴は、「明るさ、陽気さ、派手さ、情熱的な感じ、動的な感じ、暖かさ」⁵⁾である。実験を行うことによって大きく回答数が減少した青と茶の 2 色は、明度が低く、冷たいイメージや暗いイメージを持つ色である。青のイメージの特徴は、「深い、固い、理知的な、強い、男性的な」⁶⁾である。茶のイメージの特徴は、「暗さ、陰気さ、深さ、重さ、にごった感じ、地味さ、大人っぽさ、男性的な」⁷⁾である。

以上の結果より、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みをイメージする色は暗さや、暗さ、地味さや男性的なイメージを持つ色が減り、明るさ、陽気さ、暖かさのイメージを持つ色が増加することがわかった。

表 4-5 実験前後における街並みをイメージする色

	事前		事後		全体
	参加者	不参加者	参加者	不参加者	
赤	2	4	15	8	29
青	4	7	1	5	17
灰	5	0	3	1	9
茶	7	0	0	0	7
緑	1	2	2	1	6
橙	0	0	4	0	4
藍	1	2	0	1	4
黒	2	0	0	1	3
黄	1	0	0	0	1
無回答	9	10	7	8	34
計	32	25	32	25	114

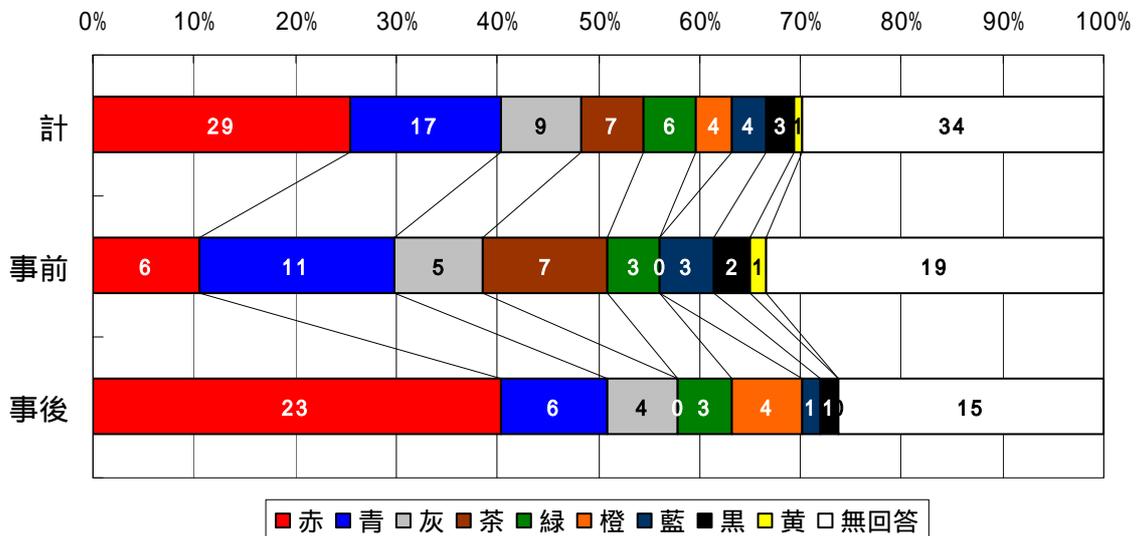


図 4-1 実験前後における街並みをイメージする色の記述数(全体)

4-3-2 街並みをイメージする色の傾向(参画者×不参画者)

参画者、不参画者毎の集計結果を図 4-2 に示す。

参画者と不参画者の事前アンケートの結果を比較してみると、茶と灰の割合に違いが見られる。街並みをイメージする色として、参画者では茶や灰と回答する割合が高くなっているが、不参画者では茶と灰の回答が見られない。

茶は「4-3-1 街並みをイメージする色の傾向(全体)」で述べたように、暗さ、陰気さ、深さ、重さ、にごった感じ、地味さ、大人っぽさ、男性的なのイメージを持つ色である。灰は「暗い、陰気、にごった、地味な、静的な、冷たい、大人っぽい」⁸⁾イメージを持つ色である。実験前の参画者は、不参画者に比べ街並みの地味さや暗さを強く感じていたと考えられる。参画者は実験対象地域で生活しているために街並みを日常的に目にしている。そのため街並みの地味さや暗さが強く印象付けられているためであると考えられる。

次に、参画者と不参画者の実験を行う前後の街並みをイメージする色の変化を見てみる。

参画者の事前アンケートの結果では、茶が最も多く、次に青、灰の順で割合が大きくなっている。事後アンケートの結果では、赤が最も多く、次に橙、灰の順で割合が大きくなっている。

参画者の実験を行う前後の変化を見てみる。事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が増加した色は、赤と橙の 2 色である。事前アンケートの結果では、街並みをイメージする色を赤と回答したサンプルが 2 人なのに対し、事後アンケートの結果では赤と回答したサンプルは7倍強の15人に増加し、参画者の事後アンケート結果全体の45%以上を占めている。また、橙は事前アンケートの結果では見られなかった色であるが、事後アンケートの結果では4人のサンプルが街並みをイメージする色を橙と回答している。

事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が減少した色は、茶と青、黒の 3 色である。事前アンケートの結果では街並みをイメージする色を茶と回答したサンプルが 7 人と参画者の事前アンケート結果全体の 20%以上を占めているのに対し、事後アンケートの結果では、回答が無くなっている。青は事前アンケートの結果では 4 人のサンプルが回答した色であるが、事後アンケートの結果では、1/4 の 1 人に減少している。黒は事前アンケートの結果では 2 人のサンプルが回答した色であるが、事後アンケートの結果では見られなくなっている。

参画者のアンケート結果を見てみると、「4-3-1 サンプル全体から見た街並みをイメージする色の傾向」で述べた全体から見た街並みをイメージする色と同様に、実験を行うことによって大きく回答数が増加した色は、暖かいイメージを持つ色であり、大きく回答数が減少した色は、暗いイメージを持つ色であることがわかった。

不参画者の事前アンケートの結果では、青が最も多く、次に赤の割合が大きくなっている。事後アンケートの結果では、赤が最も多く、次に青の割合が大きくなっている。

不参画者の実験を行う前後の変化を見てみると、事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が増加した色は、赤のみである。事前アンケートの結果では、街並みをイメージする色を赤と回答したサンプルが4人なのに対し、事後アンケートの結果では赤と回答したサンプルは2倍の8人に増加している。

事前アンケートよりも事後アンケートの方が大きく回答数が減少した色は、見受けられない。

不参画者のアンケート結果を見てみると、実験を行うことによって大きく回答数が増加した色は、赤であった。しかし、「4-3-1 サンプル全体から見た街並みをイメージする色の傾向」で述べた、全体から見た街並みをイメージする色の変動や、上述の参画者から見た街並みをイメージする色の変動のような、大きな変化は見られなかった。

以上より、「色彩参画」による景観形成実験に参画したサンプルの方が、実験に参画していないサンプルよりも、街並みをイメージする色が大きく変動することがわかった。また、実験に参画したサンプルは、実験を行うことによって街並みでイメージする色として、暖かいイメージを持つ、赤や橙といった色を選択しやすくなり、暗いイメージを持つ色を選択しにくくなることがわかった。

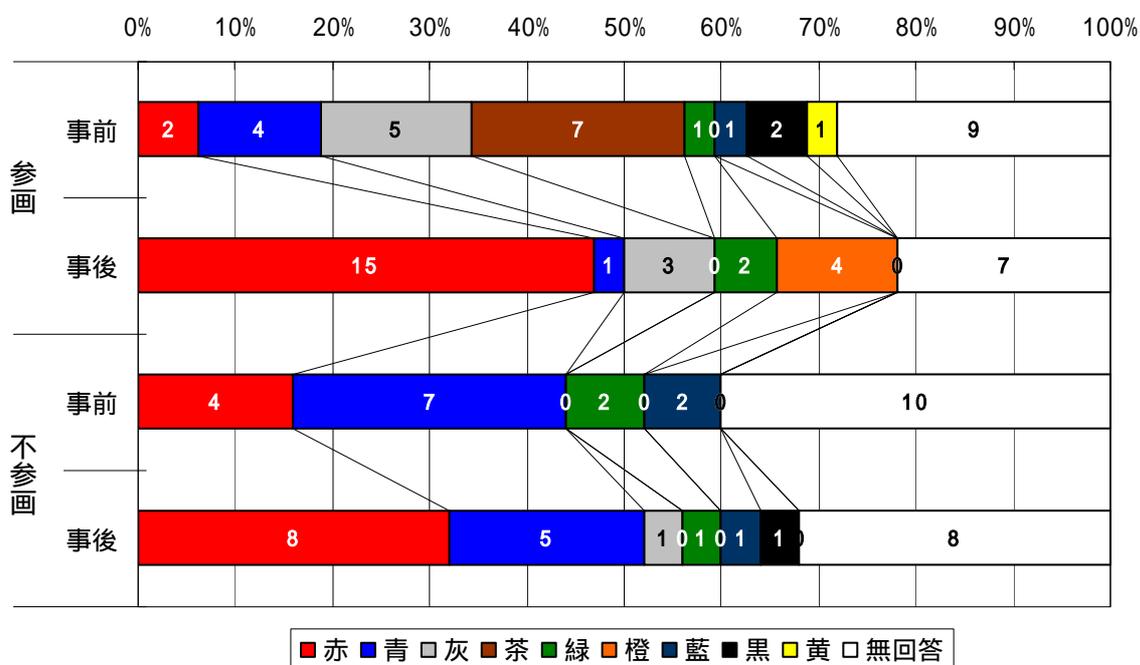


図 4-2 実験前後における街並みをイメージする色の記述数(参画者×不参画者)

4-3-3 街並みをイメージする色の想起理由

街並みをイメージする色の想起理由の傾向を明らかにするために、4-3-1 で集計を行った各色の想起理由の分類と単純集計を行い、考察する。なお、想起理由の分類方法は「3-2-1 街並みをイメージする色の単純集計」で述べた分類基準を用いる。

「街並みをイメージする色」項目へ回答された色の想起理由の集計結果を表 4-6、図 4-3 に示す。

「プラスイメージ」からの想起理由の割合が大きい色は、赤と橙であった。赤は記述量が多く、50%以上を「プラスイメージ」の想起理由が占めている。橙は記述量は少ないものの、75%を「プラスイメージ」の想起理由が占めている。赤の想起理由は「暖かさ」や「華やかさ、暖かさ」、「活気を呼ぶ」など暖かさや華やかさに関する記述が目立った。「プラスイメージ」以外では「太鼓祭りでのハッピをイメージ」、「井伊の赤鬼をイメージ」といった、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由や、「14 日は赤いものが目に付いたので」といった、「実験のイメージ」からの想起理由などであった。橙の想起理由は「穏やかで暖かい色」、「気分が華やかになった」などであり、赤の想起理由と類似した想起理由が記述されていた。

「マイナスイメージ」からの想起理由の割合が大きい色は灰であった。灰は 50%以上を「マイナスイメージ」の想起理由が占めている。灰の想起理由は「沈滞化した商店街」や「町全体が暗いから」など街並みの活気の無さ、街並みの暗さに関する記述がほとんどであった。「マイナスイメージ」以外の想起理由は「旧宿場町のイメージ」であり、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由であった。

「具体的な対象のイメージ」からの想起理由の割合が大きい色は青であった。青は 60%以上を「具体的な対象のイメージ」からの想起理由の記述が占めている。青の想起理由は「琵琶湖をイメージして」、「川・水をイメージ」など琵琶湖、河川の水に関する記述がほとんどであった。想起理由の対象は具体的ではあるが、対象地域である高宮町に直接的な関わりのあるものではない。「具体的な対象のイメージ」からの想起理由以外は、「寂れた町」、「盛り上がり欠ける」といった、「マイナスイメージ」からの想起理由であった。

「プラスイメージ」からの想起理由、「マイナスイメージ」からの想起理由、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由がほぼ同数となっていた色は茶であった。茶の想起理由の内容を見てみると、「古風な感じがするから」、「古い木造住宅が多く、暖かくふんわりとした感じがするため」、「古く寂れているイメージ」、「中山道の街並み」といったように、街並みの古さに関する想起理由がほとんどを占めていることがわかった。

なお、街並みをイメージする色の想起理由において、参画者と不参画者の間に明確な差は見られなかった。

表 4-6 街並みをイメージする色の想起理由

	プラスイメージ	マイナスイメージ	具体的な対象のイメージ	実験のイメージ	その他	無回答	計
赤	15	1	7	4	1	1	29
青	3	3	11	0	0	0	17
灰	1	5	2	0	0	1	9
茶	2	3	1	0	0	1	7
緑	3	0	1	0	2	0	6
橙	3	0	0	1	0	0	4
藍	0	0	2	0	0	2	4
黒	1	1	1	0	0	0	3
黄	0	1	0	0	0	0	1
計	27	14	25	5	3	5	80

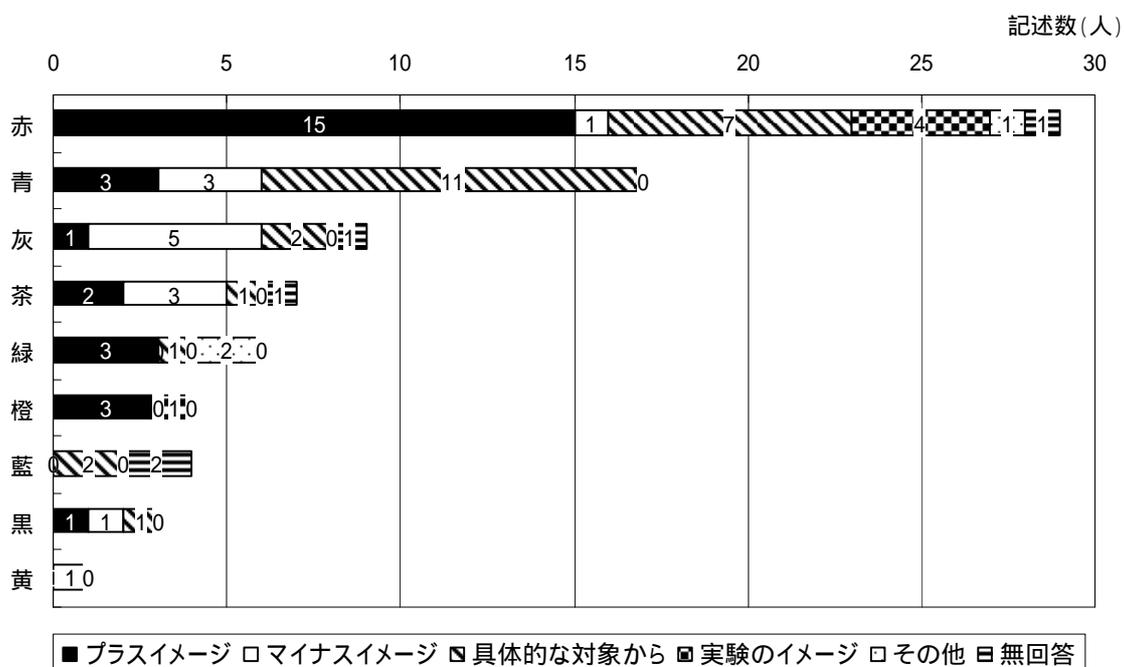


図 4-3 街並みをイメージする色の想起理由

4-3-4 街並みをイメージする色のまとめ

街並みをイメージする色について、以下にまとめる。

- サンプル全体では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みをイメージする色は、暗さや固さ、地味さのイメージを持つ色が減り、明るさ、陽気さ、快活さのイメージを持つ色が増加する。
- 参画者では、街並みをイメージする色を赤と答えるサンプルが7.5倍に増加するなど、サンプル全体に比べて、街並みをイメージする色が暖かいイメージを持つ色へ変化する傾向が顕著である。
- 不参画者では、街並みをイメージする色を赤と答えるサンプルが増加しているものの、サンプル全体や参画者と比べると、全体的に街並みをイメージする色の変化は小さい。

街並みをイメージする色の想起理由について、以下にまとめる。

- 実験後に大きく記述数が増加した色は赤と橙であった。赤と橙の想起理由は、街並みの活気に関する「プラスイメージ」の記述がほとんどであり、これらの色は街並みに活気を感じた、もしくは活気を願う心から選択されたと考えられる。
- 実験後に大きく記述数が減少した色は青と茶であった。青の想起理由は、「具体的な対象のイメージ」からの想起理由がほとんどであった。しかし、その多くは対象地域である高宮町に直接関係するものではなく、「琵琶湖をイメージして」や「川・水をイメージして」という理由であった。茶の想起理由は「プラスイメージ」によるものと、「マイナスイメージ」によるものの割合の差はほとんど無いものの、その想起理由は街並みの古さに関するものがほとんどであった。
- 街並みをイメージする色の想起理由において、参画者と不参画者の間に明確な差は見られなかった。

以上の結果より、サンプルの抱く街並みをイメージする色の傾向を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を選びやすくなる傾向があることがわかった。つまり、実験を行うことによって、サンプルは街並みに活気を感じた、もしくは活気を願うようになったと考えられる。この傾向は、不参画者よりも参画者の方が顕著に現れている。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みの古さをイメージする色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験を行うことによって、街並みの古さのイメージが薄くなったと考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、対象地域との関わりの薄い色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験をおこなうことによって、実験前には意識していなかった、新しいイメージを対象地域の街並みに感じるようになったと考えられる。

4-4 街並みへの関心に関するアンケート結果

4-4-1 街並みへの関心の傾向(全体)

街並みへの関心の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケート内の「街並みへの関心」項目⁹⁾への回答結果を分類、単純集計し、考察を行う。

「街並みへの関心」項目へ回答された景観要素の分類方法は「3-2-2 街並みへの関心の単純集計」で述べた分類基準を用いる。回答された景観要素の分類は「中山道に関する記述」、高宮町の「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」、「電柱・街路灯に関する記述」、「その他の記述」の5項目に分類した。「シンボルに関する記述」とは「3-2-2 街並みへの関心の単純集計」で述べたように、大鳥居や常夜燈、無賃橋などといった景観要素が記述されているものである。

「街並みへの関心」項目へ回答された景観要素の集計結果を表4-7、図4-4に示す。

全体の合計値では、「中山道に関する記述」が最も多く、次に「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」、「その他の記述」、「電柱・街路灯に関する記述」の順で割合が大きくなっている。

事前アンケートの合計値では、「中山道に関する記述」が最も多く、次にシンボル、電柱・街路灯の順で割合が大きくなっている。事後アンケートの合計値では、「中山道に関する記述」が最も多く、次に「シンボルに関する記述」、「家屋・空き地に関する記述」の順で割合が大きくなっている。

実験を行う前後の回答数の変化を見てみると、事後アンケートでは事前アンケートに比べて、回答数が減少していることがわかる。記述数は21減少している。減少した記述の内容を見るために、実験を行う前後の景観要素の変化を見てみると、事前アンケートでは全体の20%弱を占めていた「電柱・街路灯に関する記述」が見られなくなっていることがわかる。一方、「電柱・街路灯以外に関する記述」以外の記述では、実験を行う前後での変化はほとんど見られない。事前アンケート結果での電柱・街路灯の記述数は13であった。回答数の減少分全体の60%以上を占めている。

以上より、「街路灯」、「電柱」、「中山道の電柱」といった「電柱・街路灯に関する記述」が、実験を行うことによって減少することがわかった。「電柱・街路灯に関する記述」は、減少した回答のほとんどを占めていることがわかった。実験を行うことにより、街並みの電柱や街路灯に対する不満が少なくなったと考えられる。つまり、街並みを考える上で、電柱や街路灯への関心が薄くなったと考えられる。

表 4-7 実験前後における街並みへの関心の分類結果

	参加者		不参加者		全体	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
中山道	10	11	10	8	20	19
シンボル	12	12	3	2	15	14
家屋・空き地	5	5	5	3	10	8
電柱・街路灯	8	0	5	0	13	0
その他	6	3	5	3	11	6
計	41	31	28	16	69	47

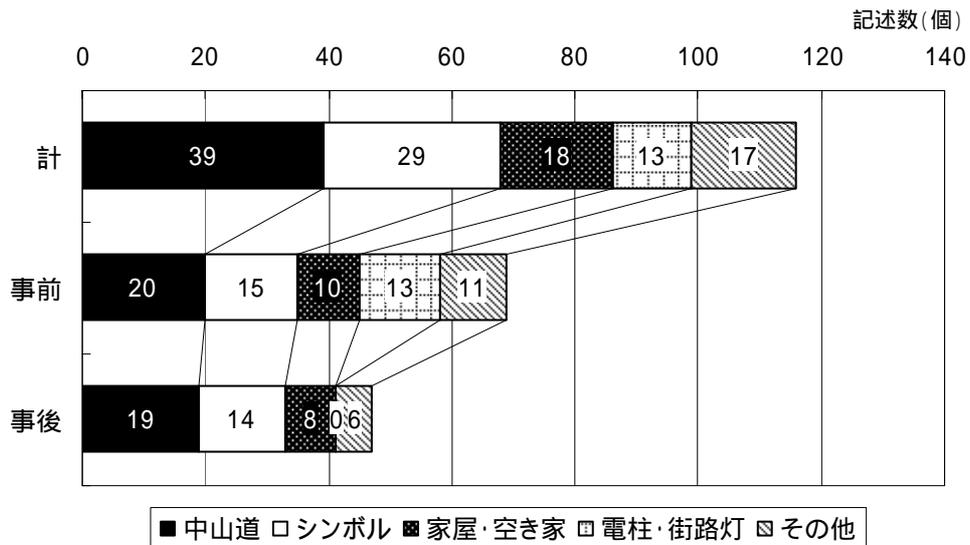


図 4-4 実験前後における街並みへの関心の傾向(全体)

4-4-1 街並みへの関心の傾向(参画者×不参画者)

参画者、不参画者毎の集計結果を図 4-5 に示す。

事前アンケート、事後アンケートともに参画者と不参画者間の回答数に差があるように見える。実験の前後ともに参画者の方が街並みの関心が高いと考えられる。参画者は対象地域内で生活を営んでいるために、日常的に対象地域の街並みを目にしている。そのため、街並みの不満点や保護したい点を多く想起しやすいためであると考えられる。

統計的にこの差を明らかにするために、有意水準 0.05 で Pearson のカイ二乗検定を行い両者の回答数の差を検定した。事前アンケートに対する検定結果を表 4-8、事後アンケートに対する検定結果を表 4-9 に示す。

事前アンケートへの検定の結果、漸近有意確率 0.382 となった。 $0.382 > 0.05$ であるために、事前アンケートの回答数に統計的な有意差があるとはいえない。

事後アンケートへの検定の結果、漸近有意確率 0.077 となった。 $0.077 > 0.05$ であるために、事後アンケートの回答数に統計的な有意差があるとはいえない。

以上の結果より、実験の前後ともに参画者と不参画者の街並みへの関心に統計的な有意差があるとは言えない。つまり、実験を行うことによる、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がないと考えられる。

実験を行う前後の回答数の変化をしてみると、参画者、不参画者ともに、「4-4-1 サンプル全体から見た街並みへの関心の傾向」で述べた全体の回答数の変化と同様に「電柱・街路灯に関する記述」が減少していることがわかった。

表 4-8 実験への参画の有無×街並みへの関心の回答数のカイ二乗検定(事前アンケート)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ二乗	0.76	1	0.382

表 4-9 実験への参画の有無×街並みへの関心の回答数のカイ二乗検定(事後アンケート)

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ二乗	3.13	1	0.077

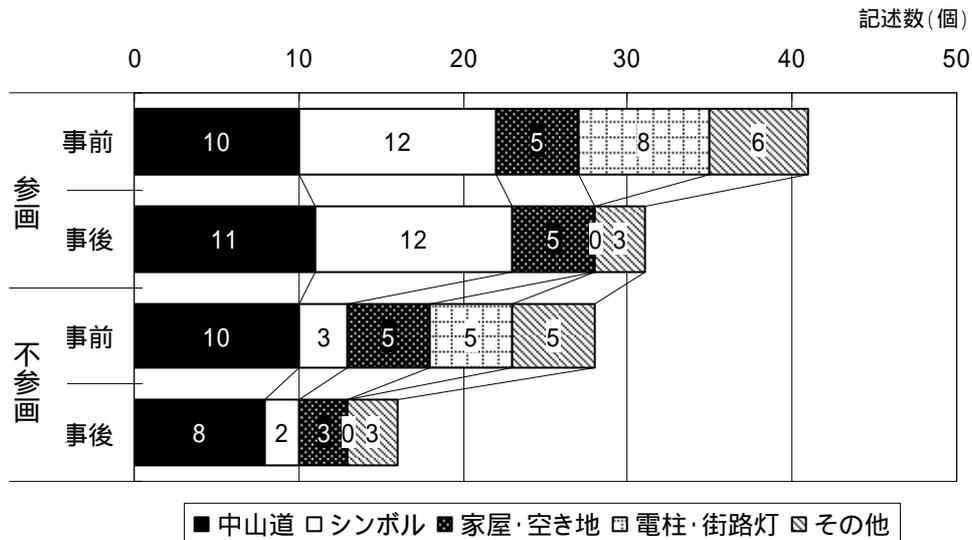


図 4-5 実験前後における街並みへの関心の傾向(参画者 × 不参画者)

4-4-3 街並みへの関心の想起理由

街並みをイメージする色の想起理由の傾向を明らかにするために、「4-4-1 サンプル全体から見た街並みへの関心の傾向」で集計を行った各分類項目の想起理由の分類及び単純集計を行い考察する。なお、想起理由の分類方法は「3-2-2 街並みへの関心の単純集計」で述べた分類基準を用いる。

「街並みへの関心」項目へ回答された想起理由の集計結果を表 4-10、図 4-6 に示す。

街並みへの関心全体の想起理由を見てみると、「利便性に関する理由」、「歴史に関する理由」、「景観に関する理由」の3つの理由によって80%以上を占めている。

「中山道に関する記述」の項目に分類された景観要素は、「利便性に関する理由」と「景観に関する理由」の二つの理由によって想起されている景観要素がほとんどであった。「利便性に関する理由」、「景観に関する理由」ともに、「中山道に関する記述」全体の35%以上を占めている。このことより、中山道は「歩きやすさ」や「車の通りやすさ」といった街並みの利便性や「色の調和」や「街並みの統一感」といったような景観の向上を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

「シンボルに関する記述」の項目に分類された景観要素は、「歴史に関する理由」によって想起されている記述がほとんどであった。「歴史に関する理由」は、「シンボルに関する記述」全体の80%以上を占めている。このことより、常夜燈や無賃橋といった高宮町のシンボルは、「宿場町の面影」や「歴史的価値」といった歴史的な理由によって関心をもたれていることがわかった。

「家屋・空き地に関する記述」の項目に分類された景観要素は、「景観に関する理由」によって想起されている記述が最も多かった。「景観に関する理由」は「家屋・空き地に関する記述」全体の50%を占めている。このことより、家屋や空き地は「色の調和」や「街並みの統一感」といったような街並みの景観の向上を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

「電柱・街路灯に関する記述」の項目に分類された景観要素は、「利便性に関する理由」によって想起されている景観要素がほとんどであった。「利便性に関する理由」は「電柱・街路灯に関する記述」全体の75%以上を占めている。このことより、電柱や街路灯は「歩きやすさ」や「車の通りやすさ」といった街並みの利便性を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

表 4-10 街並みへの関心の想起理由の分類結果

	利便	歴史	景観	その他	無回答	計
中山道	14	6	15	3	1	39
シンボル	0	24	3	0	2	29
家屋・空き地	2	2	9	1	4	18
電柱・街路灯	10	1	2	0	0	13
その他	2	1	6	6	2	17
計	28	34	35	10	9	116

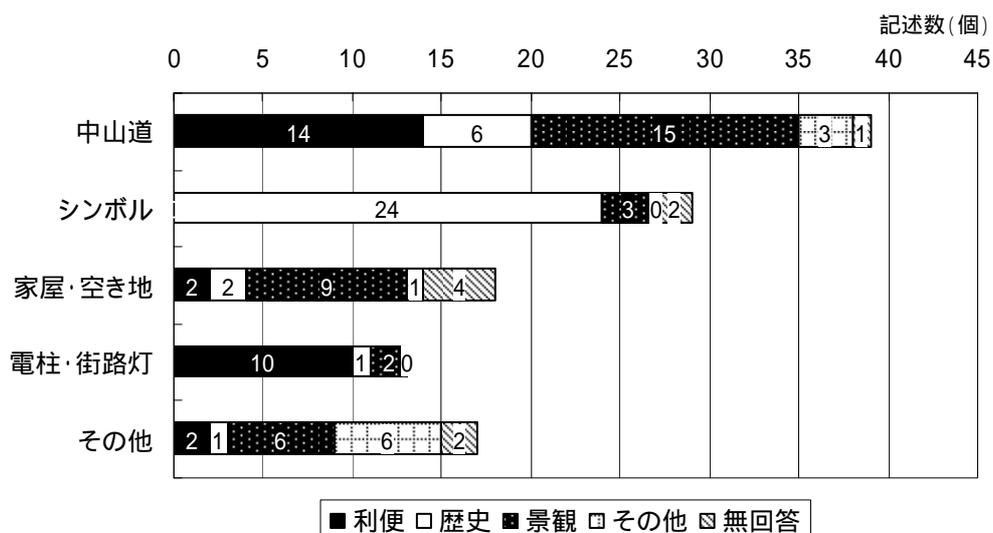


図 4-6 街並みへの関心の想起理由の傾向

4-4-4 街並みへの関心のまとめ

街並みへの関心について、以下にまとめる。

- サンプル全体では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少することがわかった。また、「電柱・街路灯に関する記述」以外では、ほとんど変化が見られなかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、参画者、不参画者ともに、サンプル全体と同様に「電柱・街路灯に関する記述」が減少することがわかった。また、「電柱・街路灯に関する記述」以外は、ほとんど変化が見られなかった。
- 実験を行うことにより、街並みの電柱や街路灯に対する不満が少なくなったと考えられる。つまり、街並みを考える上で、電柱や街路灯への関心が薄くなり、相対的に電柱や街路灯以外の構成要素への関心が強くなったと考えられる。
- Pearson のカイ二乗検定を用いて、参画者と不参画者の回答数を有意水準 0.05 で比較した結果、実験の前後ともに参画者と不参画者の街並みへの関心に差があるとは言えなかった。つまり、実験を行うことによる、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がないと考えられる。

街並みへの関心の想起理由について、以下にまとめる。

- 街並みへの関心の想起理由の割合に、大きな特徴が見られた分類項目は、「シンボルに関する記述」、「電柱、街路灯に関する記述」の2項目であった。
- 「シンボルに関する記述」の想起理由は、「歴史に関する理由」がほとんどであった。つまり、常夜燈や無賃橋といった高宮町のシンボルは、「宿場町の面影」や「歴史的価値」といった歴史的な理由によって関心をもたれていることがわかった。
- 「電柱・街路灯に関する記述」の想起理由は、「利便性に関する理由」がほとんどであった。つまり、街並みにある電柱や街路灯は「歩きやすさ」や「車の通りやすさ」といった街並みの利便性を求める理由によって関心をもたれていることがわかった。

以上の結果より、サンプルの抱く街並みへの関心の傾向を以下にまとめる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向がわかった。「電柱・街路灯に関する記述」の想起理由は、「利便性に関する理由」がほとんどであった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性についての不満が減少したと考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後において、「電柱・街路灯に関する記述」以外では、ほとんど変化が見られなかった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性以外の欲求は、実験によって変化しないと考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後ともに、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がない。

4-5 実験への参画度に関するアンケート結果

4-5-1 飾り付けた数量の傾向

実験への参画度の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケート内の「実験への参画度」項目への回答を単純集計し、考察を行う。

「実験への参画度」項目へ回答された、街並みに飾り付けたものの数量の集計結果を表4-11、図4-7に示す。

表 4-11 街並みに飾り付けた数量

数量	サンプル数
1	2
2	1
3	7
4	2
5	2
6	5
7	5
8	3
9	2
10~	3
計	32

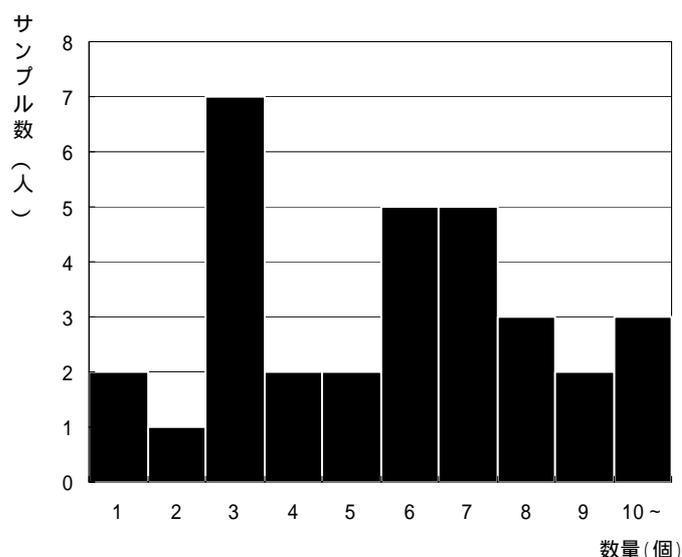


図 4-7 街並みに飾り付けた数量の傾向



図 4-8 飾りつけの様子

街並みへ飾り付けた数量を集計した結果、3個飾り付けたサンプルが最も多いことがわかった。以下、6個、7個と飾り付けたサンプルが続いている。また、最も少なかったのは2個飾り付けたサンプルであった。

飾り付けたものが10個以上のサンプルも見受けられた。

4-5-2 飾り付けた種類数の傾向

実験への参画度の傾向を明らかにするために、景観認識に関するアンケート内の「実験への参画度」項目への回答を単純集計し、考察を行う。

「実験への参画度」項目へ回答された、街並みに飾り付けたものの種類数の集計結果を表 4-12、図 4-9 に示す。

表 4-12 街並みに飾り付けた種類数

種類数	サンプル数
1	5
2	6
3	2
4	3
5	7
6	5
7	3
8	1
計	32

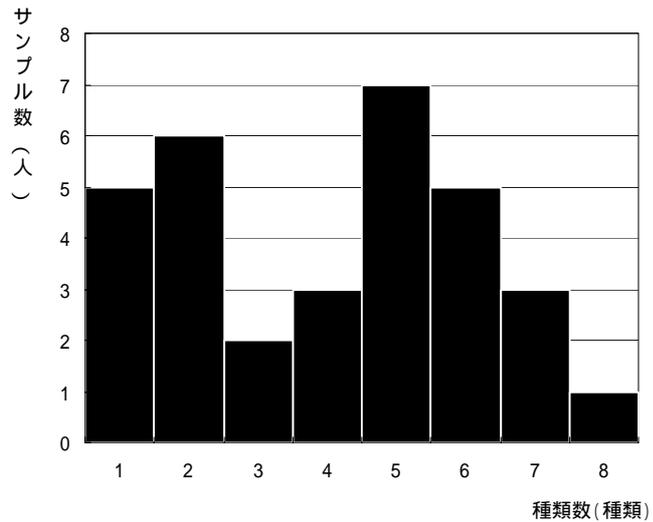


図 4-9 街並みに飾り付けた種類数の傾向



図 4-10 最も多くの種類を飾り付けた例

飾り付けた種類数が最も多かったのは 8 種類飾り付けたサンプルであった。

街並みへ飾り付けた種類数を集計した結果、最もサンプル数が多いのは 5 種類飾り付けたサンプルであった。以下、2 種類、1 種類、6 種類を飾り付けたサンプルが続いている。また、最もサンプル数が少なかったのは 8 種類飾り付けたサンプルであった。

4-6 実験への参画度によるサンプルの分類

「4-5 実験への参画度に関するアンケート結果」で得た集計結果を基に、飾り付けた数量と飾りつけた種類数によってクロス集計を行い、実験への参画度により参画者の分類を行う。

街並みに飾り付けた数量と飾り付けた種類数のクロス集計結果を表 4-13、図 4-11 に示す。

表 4-13 街並みに飾り付けた数量と種類数のクロス集計結果

		飾り付けた種類数								計
		1	2	3	4	5	6	7	8	
飾り付けた数量	1	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	3	1	4	2	0	0	0	0	0	7
	4	0	0	0	2	0	0	0	0	2
	5	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	6	0	1	0	0	1	3	0	0	5
	7	0	0	0	0	2	1	2	0	5
	8	0	0	0	1	2	0	0	0	3
	9	0	0	0	0	0	1	1	0	2
	10~	2	0	0	0	0	0	0	1	3
計		5	6	2	3	7	5	3	1	32

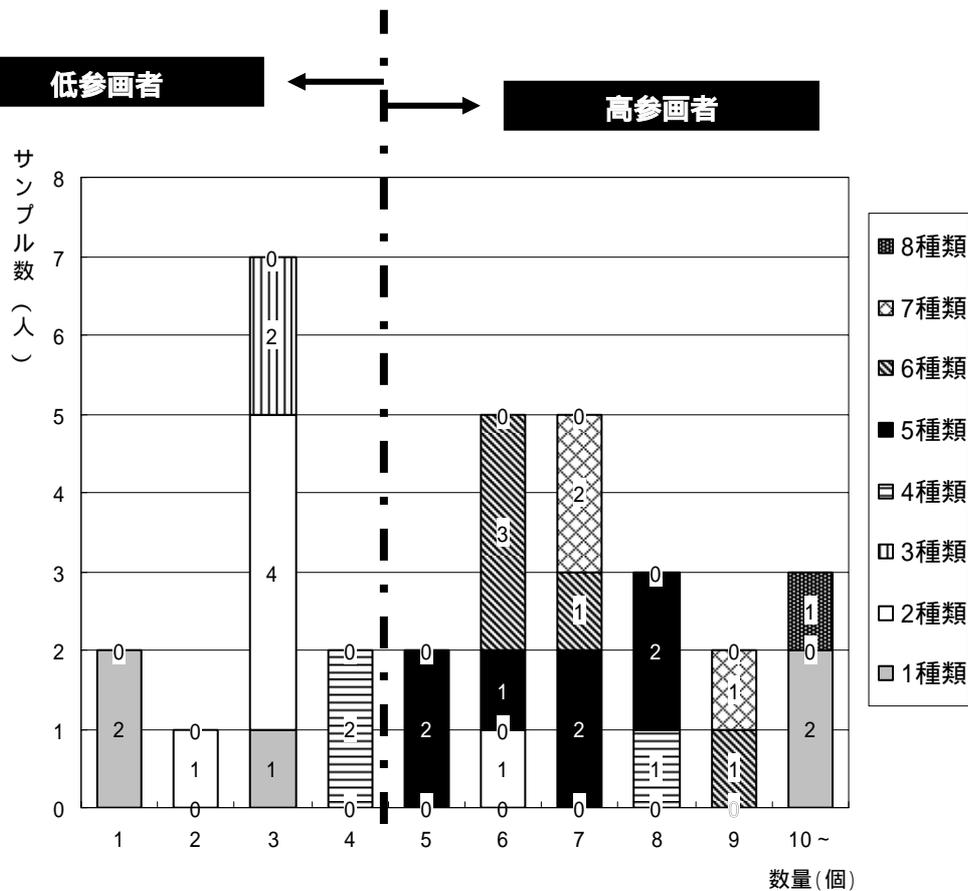


図 4-11 街並みに飾り付けた数量と種類数のクロス集計結果

図 4-11 を見てみると、街並みへ飾り付けた数量が 5 個以上と 5 個未満を分類軸として、サンプルの分類を行うと、飾り付けた種類数の割合も大きく二分されることがわかった。

以上の結果より、街並みに飾り付けた数量が 5 個以上のサンプルを「高参画者」、街並みに飾り付けた数量が 5 個未満のサンプルを「低参画者」と分類した。

以上のように、実験への参画度によって参画者を 2 つの参画タイプに分類することが出来ると考えられる。

「低参画者」、「高参画者」の詳細は表 4-14 を参照。

表 4-14 飾り付けた数量によるサンプルの分類

	低参画者	高参画者	計
飾り付けた数量	5 個未満	5 個以上	
サンプル数	12	20	32

4-7 まとめ

本章では、本研究で実施した調査の結果を単純集計、クロス集計、カイ二乗検定を用いて明らかにしてきた。以下に、本章で得られた結果をまとめる。

街並みをイメージする色の集計結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を選びやすくなることがわかった。つまり、実験を行うことによって、サンプルは街並みに活気を感じた、もしくは活気を願うようになる傾向にあることがわかった。この傾向は、不参画者よりも参画者の方が顕著に現れている。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みの古さをイメージする色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験を行うことによって、街並みの古さのイメージが薄くなる傾向にあることがわかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、対象地域との関わりの薄い色をイメージしにくくなることがわかった。つまり、実験をおこなうことによって、実験前には意識していなかった新しいイメージを対象地域の街並みに感じるようになる傾向にあることがわかった。

街並みへの関心の集計結果

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向がわかった。「電柱・街路灯に関する記述」の想起理由は、「利便性に関する理由」がほとんどであった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性についての不満が減少する傾向にあることがわかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は、「電柱・街路灯に関する記述」以外では、ほとんど変化が見られなかった。つまり、「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性以外の欲求は、実験を行っても変化しない傾向にあることがわかった。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後ともに、参画者の街並みへの関心の変化と不参画者の街並みへの関心の変化に大きな差がないことがわかった。

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画度によるサンプルの分類

- 街並みに飾り付けたものの数量と種類数によってクロス集計を行った結果、街並みへ飾り付けた数量が5個以上と5個未満を分類軸として、飾り付けた種類数の割合も大きく二分されることがわかった。
- 街並みに飾り付けた数量が5個以上のサンプルを高参画者に、街並みに飾り付けた数量が5個未満のサンプルを低参画者に分類することが出来た。

以下に、本章で得られた結果を基に考察を行う。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を、街並みをイメージする色として選びやすくなる傾向にあることが示された。また、街並みの古さをイメージする色や、対象地域との関わりの薄い色を選びにくくなる傾向にあることが示された。さらには、実験の感想として「静かで色味の無い町が、赤く色づけて頂いて浮きたっているよう」や「町が明るく感じました」ということが聞かれた。つまり、実験をおこなうことによって街並みの古さのイメージが薄くなり、実験前は意識していなかった街並みの活気を感じた、もしくは活気を願うようになると考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向にあることが示された。「電柱・街路灯に関する記述」は「歩きにくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性を理由として想起されているものがほとんどであった。また、「電柱・街路灯に関する記述」以外は実験の前後で大きな変化をしないことが示された。実験を行っても、歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心は変化しないと考えられる。つまり、実験は歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心へは影響しないと考えられる。また、実験を行うことによって変化するのは街並みの利便性への関心であり、街並みの利便性に対する不満が減少すると考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後において、参画者と不参画者の街並みへの関心の傾向に差が見られなかったことから、実験への参画の有無は街並みへの関心に大きな影響を与えないと考えられる。

脚注及び参考文献

¹⁾巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票 設問 A-2、事後アンケート調査票 設問 A-4)

²⁾巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票 設問 A-3.4、事後アンケート調査票 設問A-2.3.5.6)

³⁾巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票 設問 A-1、事後アンケート調査票 設問 A-1)

⁴⁾財団法人日本色研究所編：色イメージと配色，日本規格協会，p.25，(1993)

⁵⁾財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.35，(1993)

⁶⁾財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.41，(1993)

⁷⁾財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.97，(1993)

⁸⁾財団法人日本色研究所編：前掲書，日本規格協会，p.137，(1993)

⁹⁾巻末の付録を参照

(事前アンケート調査票 設問 A-4，事後アンケート調査票 設問 A-6)